

賤ヶ岳古戦場

両軍の砦復元

監修…中井均氏 NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長・長浜城歴史博物館館長
イラスト…牛谷訓子

木之本、余呉から福井県境まで、北国街道をはさむように伸びる山の上に、柴田、羽柴の両軍は、いくつもの砦を築いた。賤ヶ岳合戦後、その役割を終えた砦の跡は、ほとんどが当時の状態を保ったまま現在も残っている。縄張り図と現地から、当時の様子を復元した。

*それぞれの所在地は7頁参照

勝家

羽柴秀吉



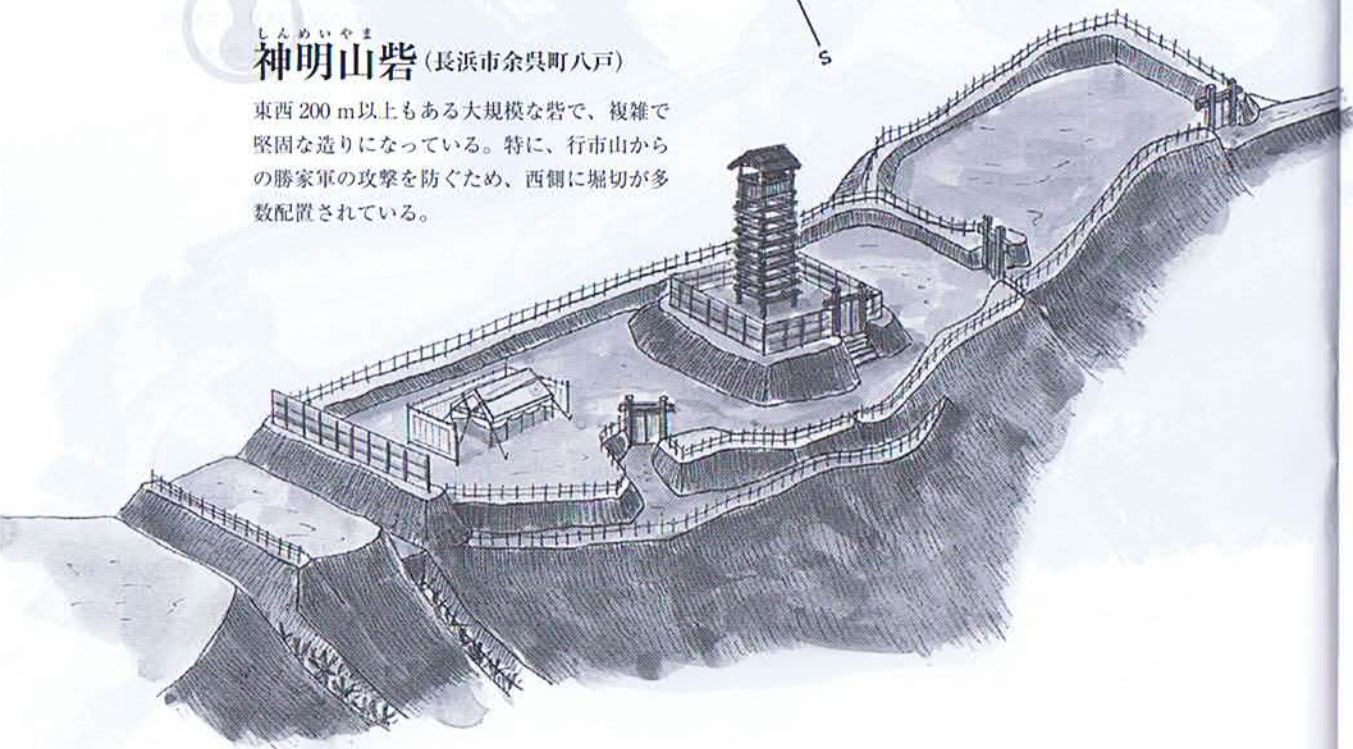
東野山砦 (長浜市余呉町中之郷)

尖山・左瀬山ともいう。賤ヶ岳合戦にあたり、北国街道の東側、東野山の山頂に造られ、羽柴軍の最前線を守った。大きく三つの曲輪から成り、巨大な土塁を矩形に組み合わせて迷路のような造りになっている。秀吉は、東野山と北国街道をはさんで向かい合う堂木山との間に柵列を設けて、柴田軍の南下を防ぐ前線とした。



神明山砦 (長浜市余呉町八戸)

東西 200 m 以上もある大規模な砦で、複雑で堅固な造りになっている。特に、行市山からの勝家軍の攻撃を防ぐため、西側に堀切が多数配置されている。





▲柴田軍側から見た賤ヶ岳古戦場

日になると、勝家の一隊が秀吉側の神明山に攻め寄せた。しかし、全面的な衝突にいたらぬうち、秀吉のもとには岐阜の織田信孝が再び挙兵したとの報が入った。秀吉は、以前に取った信孝の人質を殺害したうえ、4月16日には北近江の指揮を秀吉に一任し、大垣へ入った。

佐久間盛政の襲撃

勝家側の佐久間盛政は、秀吉が不在のうちに戦いを展開しようと考え、比較的戦備が整っていないとの情報が入った余呉湖東岸の大岩山城攻撃を、勝家に進言した。勝家はこの意見に反対したが、佐久間の熱心な弁におされ許可する。4月20日、盛政の軍は余呉湖の西岸を通って、南から大岩山に迫り、余呉湖東岸から同城を攻撃した。大岩山の守将・中川清秀は、果敢にも城外へ討つて出たが、奮戦の末、壮烈な死を遂げた。気をよくした盛政は、大岩山を落としたならば、すぐ兵を退くよう勝家から命じられていたにもかかわらず、これを無視し、そこから動く気配を見せなかった。

大垣にいて大岩山の落城を知った秀吉は、さっそく北近江へとつて返す。彼は、13里(約52km)の道程を二時半(5時間)あまりで駆け抜けた。

盛政は、秀吉の帰陣があまりにも早いのに驚き、21日に入ると月の明かりを頼りに退却を開始、余呉湖の西側を権現坂の付近まで

至った。次に、賤ヶ岳城北西にいて、盛政軍の退却を援護していた柴田勝政軍が退き始めると、秀吉は近侍の若武者に勝政軍への突撃を命じた。いわゆる賤ヶ岳七本槍の活躍が、ここで展開する。秀吉側の急迫を受けた柴田軍は、これを防ぐことができず、次々と潰走していった。さらにこのとき、柴田方の前田利家、不破勝光、金森長近は、戦線を離脱、秀吉との前年の密約を忠実に履行した。

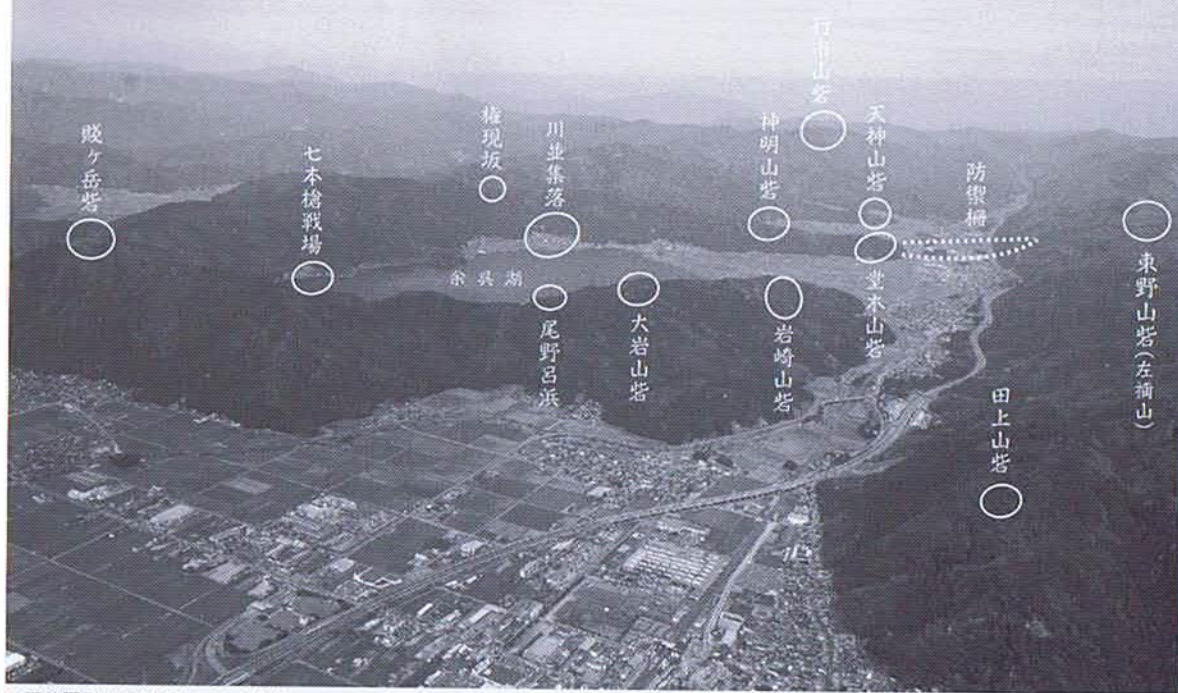
勝家本隊は、狐塚(余呉町今市)まで南下しており、あいついで襲い来る秀吉側の猛攻をよく防いでいたが、ついに勝家は近臣らの意見を入れて北陸まで落ちることを決心した。

4月21日、北庄に戻った勝家は、籠城の準備を整える。追って越前に入った秀吉は、越前府中の前田利家らを降伏させ、24日には北庄へ総攻撃をしかけた。勝家は、最後には九重の天守の頂上に登り、夫人お市の方らを刺殺した後、切腹して果てた。

北庄を落とした秀吉は、越後上杉氏、越中の佐々氏らをも降伏させ、北陸諸国を丹羽長秀と前田利家に分け与えた。さらに、盛政と勝家の実子権六を捕らえ首を斬り、織田信孝も切腹に追いやっていく。

秀吉の播磨出兵

さて、合戦のあらましは以上のようにだが、今まで賤ヶ岳合戦の研究史のなかで、ほとんど利用されていない、天正11年(1583)4月3日付の秀吉文書(長浜市長浜城歴史博



▲羽柴軍側から見た賤ヶ岳古戦場

物館蔵)を紹介することで、別の側面から戦いの推移を考えてみよう。

この文書の日付4月3日の段階は、先に述べたように、すでに柳ヶ瀬、余呉付近での両軍の対陣は始まっており、秀吉は前線を秀長に任せ、自らは後方の長浜城で指揮を執っていた。本状は、その際、秀吉が秀長へ布陣についての注意、および敵側の動きについての見解を伝えたものである。七つの一つ書きからなるが、注目すべきは次の一文である。

一、敵を五日・十日間陣取らせ、それよりも敵のもやうさけすみ候て、ゆうゆうと行に及ぶべき候、我等播州へ人数を打込候て、彼国に於いて其方より注進聞届、姫路を罷り立つべき日数と存じらるべく候、殊にあち二秀吉逗留の内、罷り出で候儀ハ不慮にて候、惣人数相そろう儀、播州より俄にかけ候よりもはやく人数揃え申すべく候ハバ、満足此の事に候、

ここで、秀吉は播磨への往復の余裕をみはからって、兵を動かすように述べており、決戦を前にして、自身播磨方面へ出兵する意志があったことが分かる。この播磨出兵は実現しなかったが、おそらく動向が不穏な中国地方の毛利氏への牽制の意図があったと考えられる。秀吉にとっては、勝家側がしきりに毛利氏を動かそうしていたことぐらいは知っていたであろうし、それにもまして、泰然として動

かぬ毛利氏は、不気味な存在であったにちがいない。秀吉の播磨出兵は、毛利氏の出兵を阻止するため、また少なくとも中立を守らせるため、自身出向いて指揮を執るつもりであったことを意味している。

それにしても、決戦を前にしての毛利氏への対応に映し出された勝家・秀吉両者の思惑には、すでにその勝敗が現れている。すなわち、勝家は、4月6日付輝元への書状で、しきりに毛利氏の出兵を要請しており、「御遅延においては、其の曲有るべからず候」と、ひたすら助力を願っている。ところが、秀吉は、4月12日の輝元への書状で、「信長家中の者に於いて、秀吉が真似を仕るべき者之無く候つる」とか、「播州より西の事ハ存ぜず、東に於いては、津軽、合浦、外浜まで、我等鎧先ニ相堪うべきの様之無きに依り、悉く羽柴頼先に応じ隙明候」と自身の力を誇る有様である。

高柳光壽氏は、賤ヶ岳合戦を詳細に分析したうえで、両将の政治力の差が戦いの勝敗を決定づけたとしている(「賤ヶ岳の戦い」)。たしかに、秀吉の勝利は、彼が清州会議以来行った政治的な根回しの結果であったことは事実であろう。その自信の表れであろうか、毛利氏への態度を見る限り、秀吉は勝家よりも優っている。合戦の勝敗は、戦う以前から決定していたというのは、ありきたりの結論であるが、歴史を後世から振り返ることができる者だからこそ言える特権とも言える。